

# イギリス カントリー・ファニチャー「ウインザーチェア」 の形態分析研究 そのI

デザイン学科

山 永 耕 平

An Analytic Study of The English WINDSOR CHAIR Styles. I  
by Kohei YAMANAGA

## ABSTRACT

In 1991, I had an opportunity to visit England to study English Furniture. I stayed for a weeks in London.

About ten years ago, I studied the English Windsor chair and actually made one with one of my students. Until then, I had made only a few chairs of a similar style. Making them was very difficult, because I had only a few Japanese wood crafts manuals, and very few books about English Country Furniture were available in Japan. But we could manage to make a few of them. When I finally got the book 'English Vernacular Furniture' by CHRISTOPHER GILBERT, I thought my work would become more successful.

Two years after that, I went to England again, I visited High Wycombe. Then I found two books: 'The English WINDSOR CHAIR' and 'Jack Hill's COUNTRY CHAIR MAKING'.

After that, I studied about 'The English WINDSOR CHAIR' and made a bow back Windsor chair with my students. Last year, I decided to write about this subject. This is the first report, written to introduce 'The English WINDSOR CHAIR' by Thomas Crispin and 'COUNTRY CHAIR MAKING' by Jack Hill to Japanese readers and I report on my previous works about the English Windsor chair. Next year, I plan to write an analytic study of English Windsor chair styles.

Only a few decades after the end of World War II, it is said that we Japanese got a tremendous economic growth, in comparison with the cultural growth. We Japanese should learn more from other countries' traditional cultures as well as our own. The English Windsor chair is, in my opinion, one of the best basic examples to be used in the teaching of modern design.

### 【はじめに】

3年前の1991年、短期海外研修の機会を得て、イギリスを主にして、イタリアのミラノ、アメリカのニューヨークの家具デザインの視察研修に出かけることができた。数週間の短い期間ではあつ

たが、ロンドンを中心にして、イギリスの貴重な家具の歴史的遺産にふれることができた。この研究報告は、それ以来取り組んできたイギリスのウインザーチェアを主題にした教育研究をまとめたものである。

イギリスの古典家具に関する研究と、その遺産

は想像を越えるもので、私個人の手におえるものではないことは、イギリスの17世紀のオークの家具の研究やコレクションにふれただけでも、一目瞭然であった。モダンデザインの源泉をたどって、広大な歴史と伝統の国イギリスの家具史の、大海原の中に踏み込んでしまい、途方に暮れていたところに、そのコレクションで知られるヴィクトリア・&・アルバート・ミュージアムで、目にしたクリストファー・ギルバートの「英国バナキュラー・ファニチャー (1750-1900)」“ENGLISH VERNACULAR FURNITURE”の著書は、私の目的をかなえるための糸口を与えてくれた。この著書が完成するまで、英国における家具の研究は、チップendaleやヘップルホワイトなどの家具デザインのように、一部の階層のエレガントでファッショナブルな家具の歴史に限られていた。それまで、地方の家具やそのメーカーのことなどは、アマチュアのコレクターなどにまかせられて、放置された状態にあったと言うのである。このクリストファー・ギルバートによって、1986年代に組織されたイギリスの地方主義家具協会 (Regional Furniture Society)によって、初めてアノニマスなデザインの世界が集大成されるきっかけとなったのである。その2年後1993年にイギリスを訪れた際、同じヴィクトリア・&・アルバート・ミュージアムで手にしたトーマス・クリスピンの著「英国ウインザーチェア」“The English WINDSOR CHAIR”は、ギルバートの流れを踏襲したウインザーチェアの研究の権威ある著書であった。本場の「ウインザーチェア」を研究するのを内心の目的にしていた私にとって、こうも早く貴重な文献にお目にかかれるとは夢にも思っていなかったことであった。

日本におけるウインザーチェアに関する研究並びに著書は、長野県松本市の民芸家具で知られている池田三四郎氏の本場イギリスにも勝るほどのコレクションと「民芸の家具」などの著書類や、鍵和田務氏の「椅子のフォークローア」などの著書類のほか、東京都の晴海の「家具の歴史館」発行の英国カントリーファニチャーの研究などで知

られている。

### 『ウインザーチェアについて』

無名の工人たちが反復生産によって、作り出すところの民芸品の中に、工芸の美の普遍的価値を見出した柳宗悦が、福岡県の小石原、大分県の小鹿田で生産されていた、当時の、下手物と言われていた陶器を、久留米の市場で見かけて、そこに民芸の美を発見した話がある。その地域に似たケースに、イギリス、ロンドンの西郊外、ウインザー地方のさらに北西の位置に、ハイウイカムという町がある。17世紀ころから続いていた民芸的椅子の生産地である。昔この地方は櫛やブナ、榆(ニレ)、トネリコ、イチイなどの原生林におおわれていた。イギリスは当時まで、いたるところに、そういった地方が存在していたが、18世紀から19世紀にかけて、全国的にシンプルでエレガントな、カントリーチェアと呼ばれる椅子が農家などで使われるようになった。それが村々のクラフトマンによって作られるようになる。いわゆるイングリッシュバナキュラーファニチャーと言われるものの一つである。これらの中にウインザーチェアの原型が見られる。一方17世紀までロンドンの中心で、家具生産に従事していた指物師たちが、18世紀初めあたりから、中心地を離れて、郊外の森に住むようになる。彼らはロクロの技術を生かして、独特の椅子を生産しはじめた。やがて、ハイウイカム地方に集中して、マニファクチャーを形成していった。そこで生産され、丈夫で廉価な椅子のことを、当時財産として価値のある高価な家具と区別して、なかば軽蔑をこめて、ウインザーの方からくる安物の家具、ウインザーチェアと呼んだと言う。(実は、はっきりとした定説はない。)18世紀後半から、19世紀にかけての産業革命で、急激に成長して行った中産階級のための郊外住宅の中や、バーやクラブに急激に普及し、やがて英国全土で造られるようになった。18世紀の後半には、アメリカに移住したイギリス人たちによってボストンを中心に、おもに北西部で造られるようになり、アメリカ全土に広まっていった。ウイリ

アムモリスのサセックスチェアや、ハンス・ウェグナーのピーコックチェアなど、近代デザイナーの模範となった。

このウインザーチェアについて、以下トーマスクリスピンの「英国ウインザー・チェア」“The English WINDSOR CHAIR”とジャック・ヒル氏の「カントリー・チェア・メイキング」“COUNTRY CHAIR MAKING”をもとに述べることにする。

### 「ウインザーチェアの由来」

英国における17世紀前半の社会史をかいまみると、この時代までは指物師がすべての家具製造にかかわっていた。1650年代頃までは、家具はすべて指物師 (Joiner) の工房から生み出され広まっていた。彼らの作る家具のおおよその材料はオーク (Ork, 主要な地元産の材木) やトネリコ (Ash), ニレ (Elm) などの地元産の材木が使用された。

種々の伝統的でイギリス的なスタイルが、その地域の伝統を吸収しながら作られるようになっていたのである。

1660年、イギリスに君主政治が復活し、数年後にはポーランドやヨーロッパに流刑されていた君主と、その宮廷人がイギリスに戻ってきた。彼らがヨーロッパで楽しんでいた生活スタイルは、イギリスとは全てにおいて異なっていた。このことは家具についても同様で、豪華な家具類がひろく言及しており、それらのほとんどの家具はウォルナットで作られ、箱もの家具の正確な制作技術によって生産されていた。デザインにおいても製造法においても、非常に洗練されたものであった。イギリスにもどった彼らは、この自国よりも洗練されたライフスタイルを家具に求めた。そのため、17世紀後半には英国の指物師たちは、その組立構造と材料のみではなく、方法においても、変りゆく世界について行かなければならなくなった。ジョイナーから高度な箱物製作に転換しなければならなくなったのである。一方では、ロンドンから田舎へと移り住み、以前の古いやり方を続けるものも現れた。このロンドンからの指物師の撤退が、

カントリーファニチャーの製作の始まりとなり、その結果、確かな地方の伝統が発展できたし、吸収もされ、地方のスタイルが繁栄することにもなったのである。

ウインザーチェアは、製作された日付を記した痕跡などの証拠から、18世紀の初めから制作され、今日までにいろいろのかたちを形成し続けている。そのことがウインザーチェアが出現以来、いつまでも続く人気と良い売行きを説明している。17世紀の終わりには、すでに作られていたかもしれないという可能性があるが、今日まだ証明はなされていない。しかしながら1708年、‘フィラデルフィアのジョン・ジョンズ、商人、ウインザーチェアの所有者、死亡。’という証明書がある。これはおそらく英国の起源のもので、1725年以前にはアメリカン・ウインザーチェアはまだ作り始められてはいなかった。そのころアメリカにおいて、すでにウインザーチェアと呼ばれていたと言うことは、この証明書はウインザーチェアが1708年以前にすでに、イギリスにおいて、その名前は良く知られていたに違いない、ということの意味している。

どうしてウインザーチェアと呼ばれるようになったかは謎であり、多くのフィクションや老女による語り伝えのなかに引用されているが、どれ一つ証明されてはいない。

もっともポピュラーな言い伝えは、ジョージIII世 (農民ジョージとあだなされた) に関係するもので、彼がウインザーの広い公園で、雨嵐にあつて、山林の住人の小屋に避難した時のことである。かれは手近にある椅子にすわった。それを気に入った彼はウインザー城に置くために同じものを一脚注文した。そこで、その名前が残るようになったという。残念なことにジョージIII世は、上の参照からしても、1708年から1738年までにウインザーチェアが手に入るころには、まだ生まれていなかった。

プリモスのエールズ (性-ウインザークライブ) に関係する話は、3代目の領主ウインザーはブラデンハムに住んでいた。そこは19世紀にウインザー

チェアを中心地として有名であったハイウイカムから数マイルのところであった。領主のウインザーは1566年、ブラデンハムにエリザベス I 世を客としてもてなした。それゆえに、彼らの姓名とウインザーチェアのそれとの関係が主張されるようになったと言う話である。残念なことにその家族がこの財産を保持していたのは、1521年から1642年のことで、ウインザーチェアが現れるずっと以前のことである。

ウインザーの名がそのまま椅子の名になったのは、ウインザー、バークシャーの町の、その地域において独自に創り出されたというのが、もっとも好ましい説明と思われる。それはその地方にはブナの森が広がっていたし、沢山の生木が手に入りやすい状態にあった、と言うことが1725年、ダニエル・ディフォーによって指摘されている。彼は「バークシャーの森にはえた膨大なブナの森は、英国のどんなほかの地方よりもより豊であった。」ということを取り上げている。「ウインザーチェア」の名前はたしかにチルトーンズ(ロンドン郊外、北西の地方)との関係を意味してはいる。また、ウインザーの町が椅子の収積や、船積みの基地としても、便利であったということが考えられる。テムズ川は椅子をロンドンへ運搬するための、優れた運送機関として備えられていた。道路もまた手にいれ安かった。パナマハットが似通ったケースとして引合いに出される。それはパナマからだけではなく、広く広がった地理学的エリアで作られ、ヨーロッパに船積みされ、便利なパナマ港からどこへでも運ばれたからである。

ウインザーチェアはおそらくその初めはガーデンチェアであった。それは素材を守るためにダーク・グリーンか黒に塗られた。1730年ロンドンのある広告に、木製の緑に塗られたウインザー・ガーデンチェアの全ての種類とサイズのトレード・カードが残されている。1720年代の英国では宮廷人達の広大な庭で使用された3角形の乗り物があり、それには3個の車が付いていた。後ろの2個は大きく、前の先には小さな一個の車が付いていた。その上に緑色に塗られたコムバック・

ウインザーチェアが乗せてあった。

### 「ウインザーチェアの変遷」

コム・バック・ウインザーチェア(図, 1)はそのアーム・ボウの上部の形状からきている。スティック(Stick, 棒)の上からかぶさるようにクレステイングレール(cresting rail, 笠木)をかぶせた形が、櫛形(Comb, コム)をしていることから呼ばれるようになった。初期のウインザーには、スプラット(Splat, 中板)の付いてないのが多いことから、スティック・バックとも呼ばれる。1708年のフィラデルフィアのウインザー・チェアはこの形のものであった。18世紀前半、当時流行した団らん図(風俗画)に数多く描かれた(図, 2)。後にボウバックやスクロールバックに取って変わられるが、二人がけ、3人がけのセティーは後まで愛好された。

ボウ・バック・ウインザー・チェア(図, 3)は、アーム・ボウの上部の構造が、スティック・バックの上に弓のように曲がった形で取り付けられていることから、そのように呼ばれるようになった。コム・バックより30~40年後に現れ、平行して作られていたが、18世紀の終わり頃にはコム・バックと入れ替わってしまった。それは、ボウ



図1 コム・バック・ウインザーチェア  
The English WINDSOR CHAIR p.16



図2 Painting C. 1750 by Edward Haytley  
The English WINDOR CHAIR p.26

バックのほうがデザインが美しく見えたし、コム・バックの構造が、より壊れやすかったためである。バック・スプラットはボウ・バックの重要な部分で、ボウバック・チェアのポピュラーな魅力に重要な役割をはたした。

ウインザーチェアは最初にその姿を現した時から二つのタイプが同時に作られた。一つはもちろんアームチェアであったが、もう一つはアームのない椅子で、シングルまたはサイドチェアと呼ばれた。シングルでも売られたし、セットでも売られた。(図, 4)

レジェンシー(1812-30)時代の到来とともにウインザーのデザインも変化し始めた。脚やサドルシートは変わらずに同じ形で残ったが、上部の背の形は徹底的に変化した。最初に現れた形はメンデリッシュャム・チェアというかたちの椅子であったが、それはまだハンドメイドによるものであった。産業革命の動きが椅子の製造法にゆっくりと訪れていた。椅子のマニュファクチャーが最初はハイ・ウイカムの南のワークソップと、北のミドランドに設立された。この二つのセンターの成長とともに、ハンドメイドから、カタログ販売による工業生産に移行していった。19世紀を通じて数多くの椅子が、ここから生産されるようになった。

この産業革命は、それまでのコム・バック、ボ

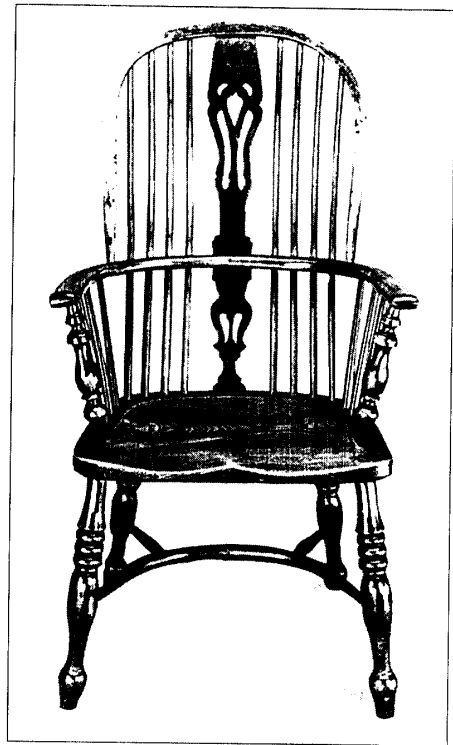


図3 ボウ・バック・ウインザーチェア  
「民芸の家具」より p.31

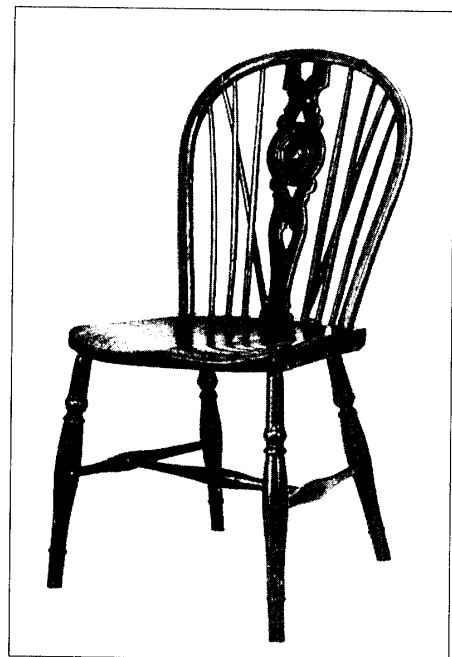


図4 シングル・ボウ・バック・ウインザーチェア  
The English WINDOR CHAIR p.98

ウ・バックのスタイルに取って変わるスクロール・バック・ウインザー(図, 5)の生産を進めてい



図5 スクロール・バック・ウインザーチェアー  
The English WINDOR CHAIR p. 158

った。このスプラットの形態が垂直から平行に移行した形の椅子は、当時、イングランドの中心で、最もポピュラーで一般的なキッチン・チェアーとなった。

このスクロール・バックにきわめて類似したタブレット・トップ・チェアーだけは、1860年に個人名のデザインとして作られた椅子として知られている。

椅子のバックスタイルの変化に比べて、シートとその下部の構造は変わることはなかったが、19世紀半ばには轆轤によるエレガントな脚が、だんだんと粗野になっていった。その結果、スモウカーズ・ボウ・ウインザー・アーム・チェアー(図、6)と言う頑丈なバラスター(Baluster, 手摺)状の、7~9本のスピンドル(Spindle, 心棒)でアームをささえた構造のウインザーチェアーが現れた。それは家庭やオフィス、研究機関、図書館、バーなどで爆発的に売れ、大量に生産された。このタイプはヨークシャー・ランカシャー・ボウ・バックチェアーの量産形を導いた。

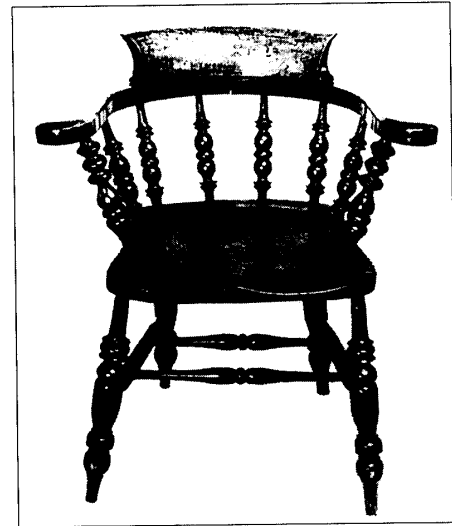


図6 スモウカーズ・ボウ・アーム・チェアー  
The English WINDOR CHAIR p. 167

### 「ウインザーチェアーの製造法」

ウインザーチェアーの製造はどのようにして形成されていったか、現在の、ウインザーチェアーの協同して製造されている技術は、もともとは、個人的にかかわった一人のクラフトマンの技巧に集中して作られ、18世紀を通じて地方的なスタイルをつくり出していた。それが19世紀にハイウイカムに集中して、椅子製造業を盛んにしていた。クラフトマン達もこれらの工場生産に個人的にかかわるようになり、技能に応じて専門的な集団を形成し、ロクロ師‘ボッジャー’(Bodger)という名前のもとに選抜されるようになったのである。

昔の工匠達は、森の中から、生木を見つけだし、それを切り倒したのち、ボウ・ソウ(Bow-saw) (図、7)、あるいはクロスカットソウ(Cross Cut Saw, 横挽鋸)で適度な長さにきりきざみ、フロー(Froe) (図、8)と呼ばれる斧、とマレット(Mallet, 木槌)で縦にわり、シェイビングホース(Shaving Horse,) (図、9)にまたがって、ドロウイングナイフ(Drawing knife, 銚) (図、10)で丸く削り出し、ポールレース(Pole Lath,) (図、11)と言う弾力のある長い棒を利用した足踏み式の木工ろくろで仕上げた。彼らはまた、ドロウイングナイフで荒削りしないですむ

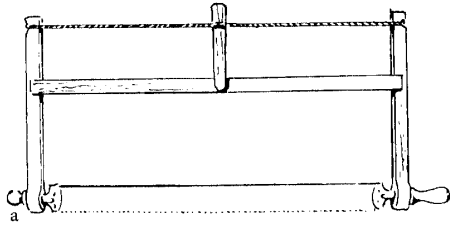


図7 ボウ・ソウ, クロス・カット・ソウ  
Dictionary of Tools, p. 410 p. 126

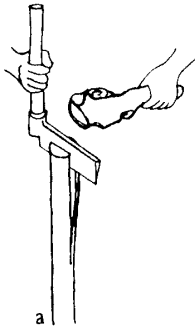


図8 フロー, マレット  
Dictionary of Tools, p. 524

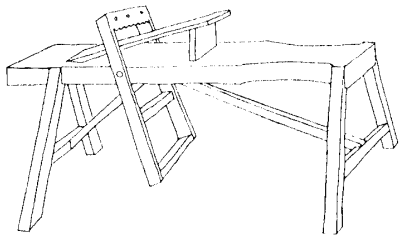


図9 シェイピング・ホース  
Dictionary of Tools, p. 127

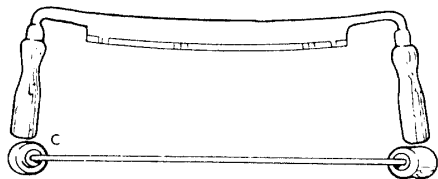


図10 ドローイング・ナイフ  
Dictionary of Tools, p. 127

貫とか、アームボウをささえる部品や垂直に立てる棒を木工ろくろで作った。(図, 12-1, -2)

座の材料となる板材は、木が切り倒された後、その幹はダブル・ハンドル・ソウ (Double-handled

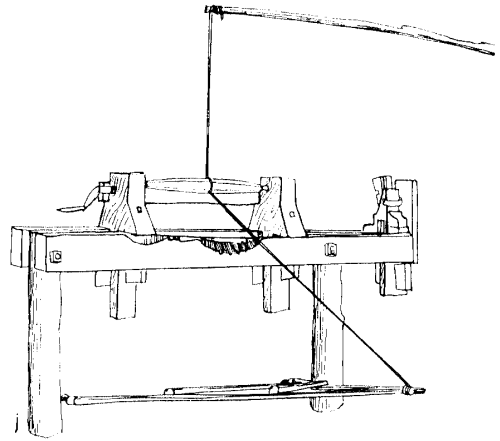


図11 ポール・レース  
Dictionary of Tools, p. 127

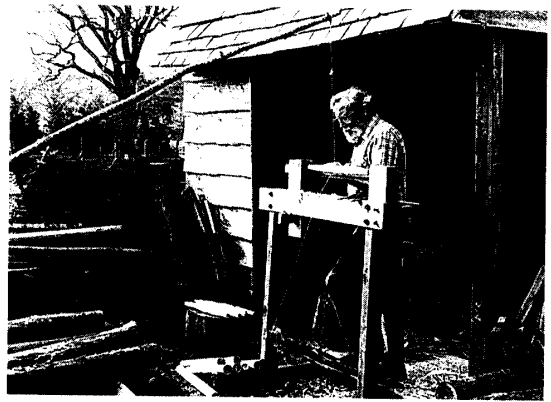


図12-1 ジャック・ヒル氏の作業風景 I  
COUNTRY CHAIR MAKING, p. 149



図12-2 ジャック・ヒル氏の作業風景 II  
COUNTRY CHAIR MAKING, p. 31

saw, 縦挽鋸) (図, 13)を使用するために施された木挽穴 (saw-pit)の上にならべられて、厚板にわかれた。(図, 14)これはソウヤー (Sawyer, 木挽)といわ

れる二人の男によって、一人は幹の上に立って、一方は幹の下側の木挽穴(saw-pit)にいて仕事がおこなわれた。座は木挽によって切り出された厚板から、必要な大きさに荒く平に切り取って、ゴールドスミス型か、あるいは後ろから前の方へ、少し長くしたスタイルの、ほとんど円形に近い形に作られた。次に座り心地を快適にするためにお皿状にけずり、あるいはもっと快適にするために座の正面をサドル形に削った。ウインザーチェアを有名にした、その美しい座の形を得るためには、それをクラフトマンの両足の間に保持して、手斧(Adze) (図, 15)で削った。それは古い時代に存在した木を削るための道具で、長い柄の付いた斧の形をしており、振り回して切り刻み、座面をつくるのに使用された。この仕事をする職人をボトマー(Bottomer)と呼んだ。(図, 16)仕上げは丸のみでボール状に削り、スクレーパーで仕上げられた。

椅子の仕上げと最後の組立には、多くの道具類が使用された。それは特別な資格と技能を持った一人のクラフトマンの手作りによるもので、座や弓形の横棒や足と貫など、柄穴の穴あけに使用された。その仕事は注目に値する興味深いもので、脚やスピンドルなどの柄穴は、ストック・ブレース(Stock Brace) (図, 17) やハンド・ブレースを使って、おおよそ黙視で計られた。しかし、より正確にコンスタントに穴を彫ることが要求された結果、この部分が最も早く機械化された部分となった。しかしウインザーチェアが工業生産される

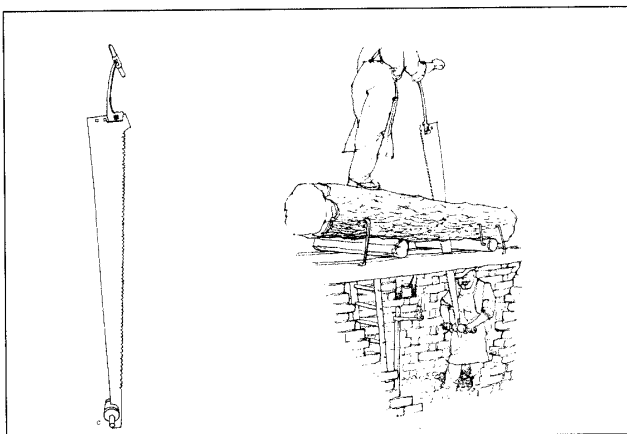


図13 ダブル・ハンドル・ソウ  
Dictionary of Tools, p. 427

図14 ソウヤーの仕事  
Dictionary of Tools, p. 443



図15 アッズ (手斧)  
Dictionary of Tools, p. 28



図16 アッズによる作業  
COUNTRY CHAIR MAKING, p. 34

ようになった後も一部で続けられた。その仕事はフレイマー(Framer)と呼ばれる男たちによってなされた。

組立はまず、座に4本の脚を取り付けることから始められた。脚を固定する貫はいわゆるその形からH型の貫に見えるように、下の骨組みとして固定されるのが一般的な形で、一方装飾的に曲げられた半円形の貫による方法もあった。それは二本の前脚間に広げられ、二本のスタブ・ストレッチャー(Stub Stretcher)という貫を通じて後ろ脚を支えた。(図, 18)この曲がった貫はしばしばカウホーン(Cow-Horn Stretcher, 牛の角型)として知られている。19世紀の半ばの時期には、貴婦人たちがクリノリンドレスをきて歩いていたが、一般的にはその形からクリノリン・ストレッチャー(Crinoline



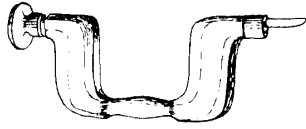


図17 スtock・ブレース  
Dictionary of Tools, p. 146

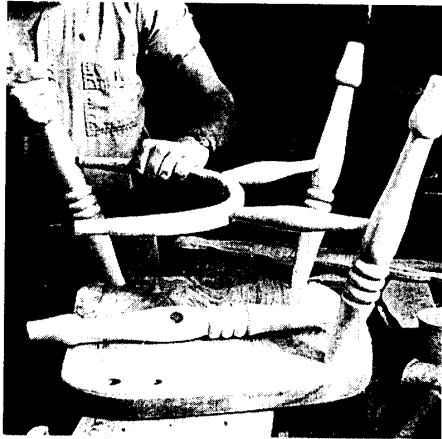


図18 クリノリン・ストレッチャーと脚の組立  
COUNTRY CHAIR MAKING, p. 140

Stretcher) の名前と呼ばれていた。

座に脚が付けそろうとスツールの形に似てくるが、それは上部構造の‘櫛形’(Comb)または‘弓形’(Bow)を取り付けるための準備であって、垂直に上に向けてスティックを組み立てて、コムバックチェアには笠木を(Top Cresting Rail)、ボウバックチェアには弓形の背(Back Bow)を取り付けた。この背の中心は平面的な装飾‘バラスター・スプラット’(手摺形の背板)で飾られるようになった。18世紀に進むと、もっと装飾的になって、この背板は、チップendaleやヘッブルホワイト等のように、当時の流行のスタイルを取り入れたものとなった。‘ホイール’はウインザーチェアの最もポピュラーな名前となり、‘ホイールバックスプラット’は英国のティーショップとパブの象徴として永久に不滅のものとなった。(図, 19)

水平に取り付けられたアームボウは、垂直にス

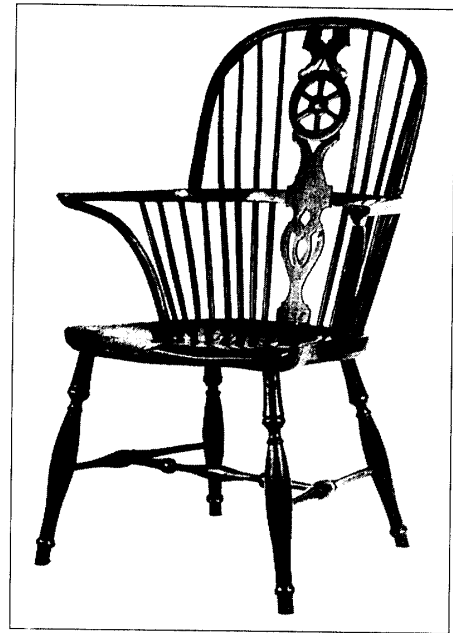


図19 ホイール・バック・ウインザーチェア  
The English WINDSOR CHAIR p. 90

ティックでささえられ、脚はロクロで仕上げたものか、またはクリノリンストレッチャーの半円の形の曲げものによって、両前脚をささえられた。アームボウとバックボウは、一般的にブナまたは西洋イチイ(Yew)の木で作られ、余り木を燃やして湯を沸かしたタンクに浸すか、スティーム・ボックスと言う蒸し器に入れて柔らかくして、フォーマー(曲げ型)にあてて曲げられた。原始的な方法はベンディングテーブルに釘と楔で固定する方法を取ったが、後に、ベンディング・ストラップ(帯鉄)を使って、クランプで固定する方法が主流をしめた。(図, 20)

19世紀半ばころのハイウイカムにおける椅子の

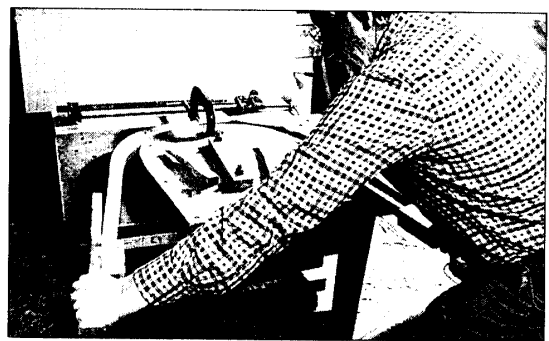


図20 ベンディング・ストラップによる曲げ木  
COUNTRY CHAIR MAKING, p. 37

生産の機械化の出現は、椅子の組立に接着剤の使用を決定づけたが、その以前は椅子の制作者(フレイマー)たちは、継ぎ手やかくしクサビや木の自然の縮みを利用して、しっかりとくっつける方法に依存していた。

### 『形態分析研究教育の今日までの取り組み』

ウインザーチェアの制作を教育研究の一つに取り上げて取り組んだのは、いまから10年余り前になる。1983年のS君の卒業制作にウインザーチェアの制作を主題に取り組んだのが最初であった。その数年前にはウインザー型のプロトタイプを考案、材料加工実習の課題として制作。なにしろ本格的な資料の整わない段階でのプロトタイプであったし、文献等の資料等、技術に関しても不十分のままではあった。

長年におよぶ経験と技術の積み重ねの上に、作られて来たウインザーチェアの形態は一朝一夜にして、解明できるものではないし、そうたやすく誰にでも作れるものでもない。しかしそこに現わされている、美というよりも、表情とでも言うべき、我々をとらえて離さない魅力は、歴史を知り、その成り立ちを知ることだけでは、把握し得ようのない世界があるように思えてしかたがない。そういう思いで、とにかく作ってみることから始めようというテーマであった。しかし入手できたかぎりの文献と、図面を起こしては試作の繰り返しで、本作と言うまでにはとうていどり着けないありさまであった。ある意味では手探りの状態であったが、生徒のおどろくほどの情熱とやる気に押されて、なんとか完成までこぎ着けたのであった。それ以来、ウインザー・チェアは形を変えて、研究テーマに上がってはいたが、本格的に正確な形態を把握するには容易なことではなかった。

やはりなんと言ってもウインザーチェアの現物をこの目で確かめないかぎり、本当のウインザーチェアを作るのは不可能である。と言うことは作ってみた当事者こそがわかることでもあった。1983年には日本民芸館を訪れ、実測調査をしたり、

1986年には松本の国際デザイン会議に参加、松本民芸館のウインザーチェアのコレクションを目の当たりにすることができた。今思うに、本場イギリスのコレクションよりもすぐるとも劣らない、貴重なものであった。

曲げ木に関しては昭和62年1987年度にS君の取り組みだ曲げ木による家具の制作は、松本民芸で見学させていただいた経験が大いに生かされて、一応の成果を上げることができた(写真1)。1989年には日本デザイン学会家具木工部会の主催による、東北研修旅行に参加させていただき、秋田木工の曲げ木家具工場の見学は貴重なものであった。その後の曲げ木の研究に貴重な体験となった。(写真、1～4)

平成元年1989年には九州産業大学特色ある教育研究の助成にて、コンピューターを導入、CADを利用して、ウインザー型のロッキングチェアを主題にした研究プロセスに取り組んだ。図面から

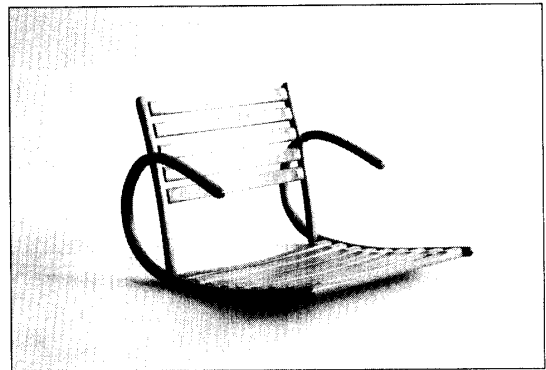


写真1 佐藤恵美子：曲げ木の研究 1988年度卒業制作



写真2 曲げ木のプロセス1：余り木を燃やして湯を沸かす。

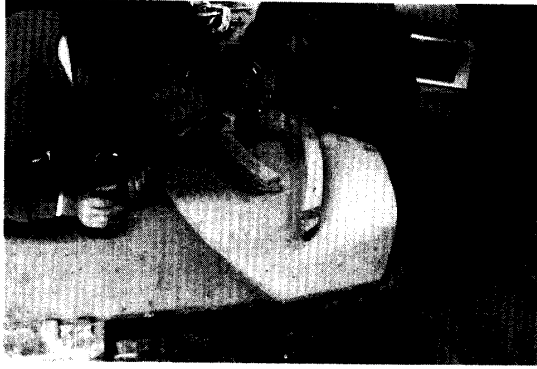


写真3 曲げ木のプロセス2：ベンディング

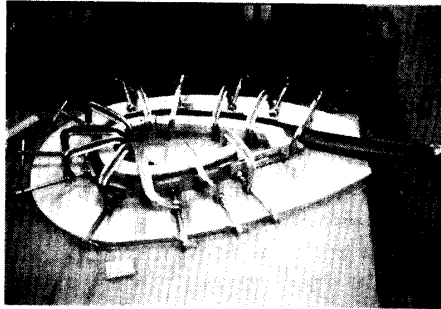


写真4 曲げ木のプロセス3：乾燥



図21 ハイ・ボウ・バック・チェアー  
The English WINDOR CHAIR p.128

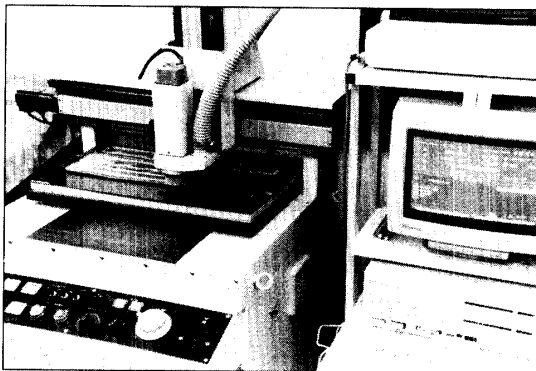


写真5 木工房 NC 設備

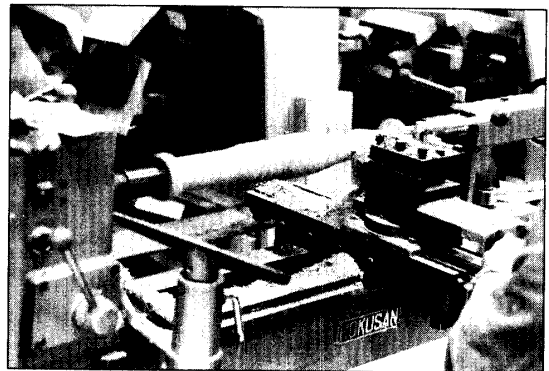


写真7 木工ロクロによる脚の加工

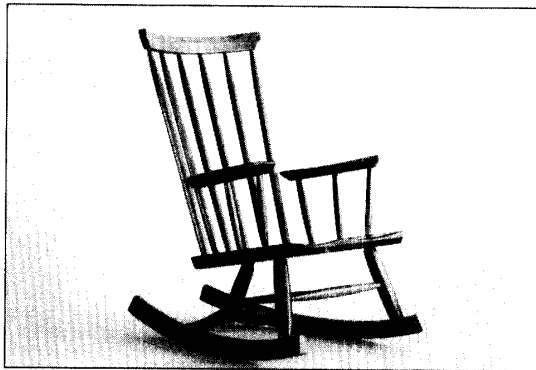


写真6 上野智司：ロッキング・チェアーの制作  
1990年度卒業制作

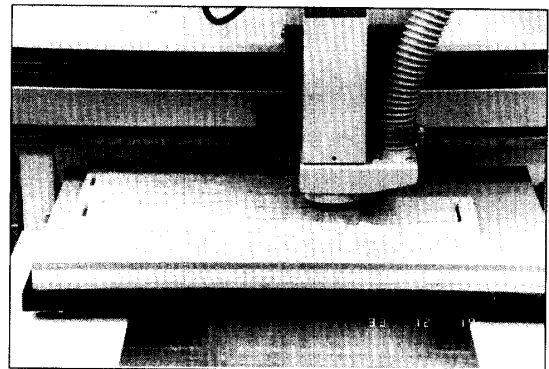


写真8 NCによるスプラットの加工

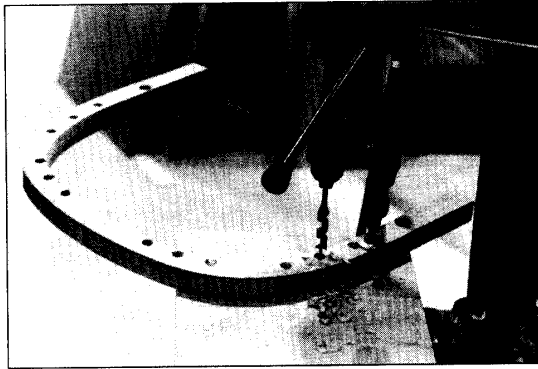


写真9 アーム・ボウのホゾ穴加工



写真10 ボウ・バックへのホゾ穴加工

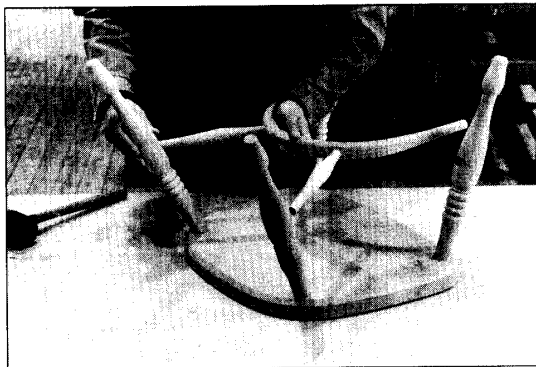


写真11 下部構造の組立



写真12 上部構造の組立

写真13-1 奥 光一：ハイ・ボウバック・ウインザーチェア  
の制作，1994年度卒業制作写真13-2 川井美香：ウインザーチェアの魅力，1994  
年度卒業制作， $\frac{1}{3}$ 模型

部品図をおこし，原寸図から部品の現寸をぬき出して，現寸図を描く技術はCADを取り入れることによって，よりたやすくなったのである。(写真，5，6)

1991年平成3年における協同研究ではNCルーターを導入，CAD，CAMを連動させて，ウインザーチェアの一層正確な形態分析が可能になった。

平成5年1993年度は、ジャック・ヒル氏の「カントリー・チェア・メイキング」にあるボウバックウインザー・チェアを試作。トーマス・クリスピンの「英国ウインザー・チェア」より18世紀の典型的なボウバックウインザーチェア(図, 21)を選んで、より忠実に近い形態のウインザーチェアを制作。(写真, 7~12, 13-1)

一方、CADを利用して、新たに1/3スケールの模型を制作(写真, 13-2)、模型による形態分析の可能性の道が開けた。今回はそれ以前のウインザーチェアに関する制作過程と形態分析研究の断片的な報告である。詳細は次回にしたい。

### 【終わりに、研究の意味】

日本はかつて、ヨーロッパに「ジャポニズム」と言う、大きな波紋を投げかけたように、独自のすばらしい文化、芸術を持っていた。しかし第二次世界大戦の敗戦と言う体験を通して、より一層の西欧コンプレックスを抱えこんだ結果、西欧に追い越せ追い抜きの早づくりの考えを生み出し、その根底にある、西欧と東洋の共通性や普遍性について、なおざりのまま、一足飛びの発展を望みすぎてしまった。そのつけが回って来たのか、ポストモダンの名のもとに、あらゆる形態のものが様式として受け入れられ、市場に氾濫した時期がバブル経済の崩壊とともになりを潜めたが、白を黒と言いつつ含めるような美的価値判断をも疑わせるものの氾濫は、その勢いを止めない。これがあたりまえなのか、不安を拭いきれないのは、私一人のみの問題ではなさそうである。もともと技芸から成り立つ芸術の範囲で考えられていたデザインの分野に、テクノロジーが容赦なく押し寄せ、初期にはその未発達のため対岸のことと考えられていた分野も、プラス、メディアとコンピューターの普及によって、急激に発展の勢いを増し、いまや誰でもデザインと言えり時代に入ろうとしている。デザインがもはや技芸の域を脱して、日常の料理のごとく誰にでも手の届く存在として大衆化すると同時に、その価値自体をも見失いかねない事態を呈している。ともあれ、グローバル化して

しまった現代社会にとって、現実を否定するわけには行かないであろう。ではどうすれば良いのであろうか。自国の伝統からはもちろん、西欧から再度、今度は、その奥にある伝統に学ぶ必要があるのであって、東洋諸国からも同様である。それが普遍化した時代に、対応するデザイン教育に、求められているのではないだろうか。

この教育研究を通じて、現代に見失われつつある、あるいはもはや、過去の遺物と化し、現代と言う時間の経過からして、絶対に計ることのできない、失ってしまった過去の生活のなかに養われた美を、なんとか現代の生活の中で追体験できないものか。過去の伝統的技法や、技術にはとうてい及ばないにしても、新しい方法、技術でもって、再びよみがえらせることができないものか、あるいは、不可能への挑戦であるかもしれない。木を扱うことや、木を愛することは叫ばれても、実際にそれを加工したり組み立てたりする環境は年々、減少するばかりである。この研究はウインザーチェアの形態を分析することによって、先人の残したものの作りを追体験し、そこから伝わってくるメッセージを、いくらかでも受け取ろうとする小さな試みである。

ウインザーチェアの研究をテーマにすることを、思い立つ以前までは、家具の形態研究(主に椅子のデザイン)を、作品発表を通して続けて来たが、日本の美の普遍性という問題に直面し、試行錯誤しているころ、民芸の家具「ウインザーチェア」の持つ普遍性に共通性を発見し、その形態分析研究がデザイン教育の面でも、重要であると思うようになったのであった。今回の「形態分析」と言うタイトルでとり組むことを思い立ったのは、3年前のイギリス研修の後のことである。昨年1994年度卒業制作で、K君の「ウインザーチェアの魅力」と言うテーマの卒論を指導して行くプロセスで、まとまってきたものである。先に触れた10年余り前に、「ウインザーチェア制作」のテーマを指導するにあたって、当時、とにかく作ってみよう、ということから始めた研究であったがために、資料など不十分のまま、進行してしまった

と言うのが事実であった。ウインザー・チェアについては、いずれ研究をまとめなければならぬと、当時から、手の届く範囲の準備はしていたが、イギリス研修旅行で、出会った最新の文献で、実現の可能性が急激に増したわけである。

昨年の学生と作ったハイ・ボウバックチェアの形態をよく分析しなおしてみると、完璧に思っていた形態が、思っていたよりも違って、それを修正しているうちに、新たなウインザーチェアの神秘に触れるような経験をするはめに陥った。それを今回発表するには、胆略すぎるので、その結果については次回にし、今回は今日までの教育研究のさわりと、トマス・クリスピン著の「英国ウインザーチェア」にもとづいて、ウインザーチェアの全体像にふれ、今後の形態分析研究にあたって、学生諸君にとって当然必要な知識の範囲のまとめとして、「イントロダクション」という形にとどめ、今回をしめくくることにした。

#### 参考文献

- 池田三四郎, 民芸の家具, (東峰書房, 1973年)
- 池田三四郎, 三四郎の椅子, (文化出版局, 1982年)
- 鍵和田務, 椅子のフォークローア, (榊柴田書店, 1977年)
- 鍵和田務, 月刊インテリアン, 連載西欧家具の歴史講座 57~61, (家具産業出版社 1992年)  
英国カントリーファニチャー, (家具保存協会家具の歴史館, 1976年)
- CHRISTOPHER GILBERT, ENGLISH VERNACULAR FURNITURE 1750-1900, (Yale University Press, 1991)
- JACK HILL, COUNTRY CHAIR MAKING, (A David Charles Book, 1993)
- MILLER'S Antiques Checklist FURNITURE, (MITCHELL BEAZLEY, 1991)
- PERCY MACQUOID, ENGLISH FURNITURE The Age of OAK, (DOVER PUBLICATIONS, INC, 1972)
- PHILIP WALKER, Woodworking Tools (SHIRE 50 ALBUM), (Shire Publications Ltd, 1992)
- S. A. SALAMAN, Dictionary of Tools, (George Allen & Unein Ltd, 1975)
- THOMAS CRISPIN, The English WINDSOR CHAIR, (Alan Sutton Publishing Inc, 1992)